

芸術普及活動の内容

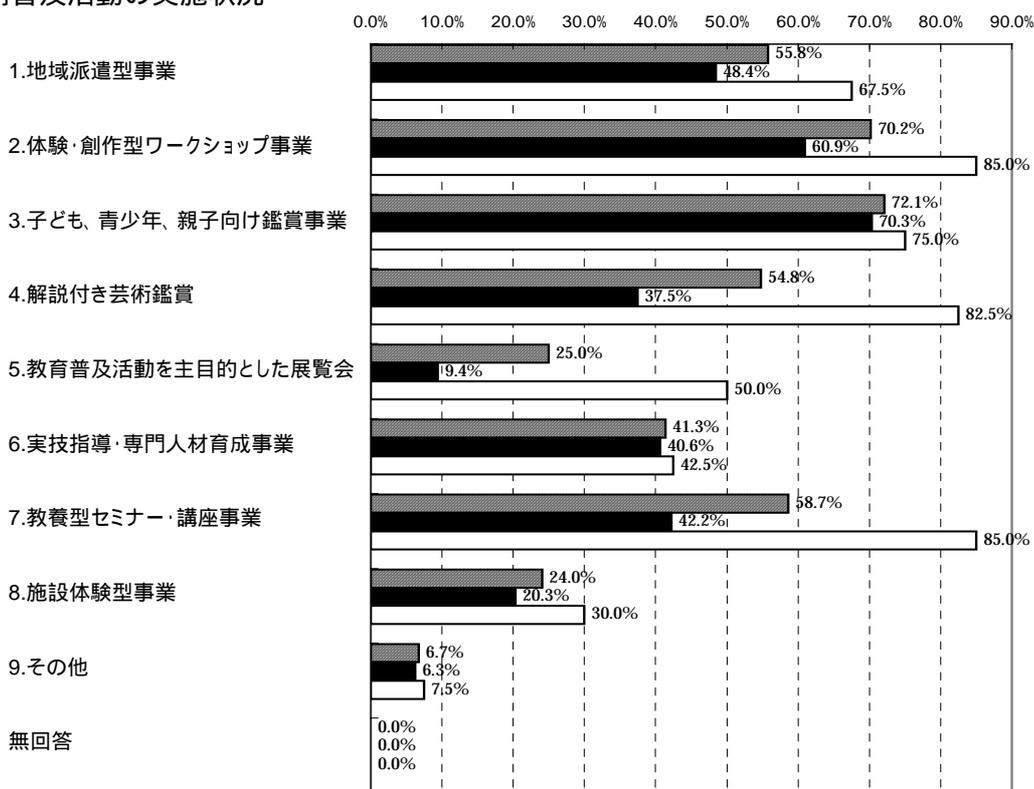
次に芸術普及活動の具体的な内容についてみてみよう。

表は、本調査の実施に際して芸術普及活動のタイプをあらかじめ想定したものである。アンケート調査では、体験・創作型ワークショップ事業、子ども・青少年・親子向け事業を実施する例が多かったが、具体的な事業を個別に見ていくと、こうしたタイプ分類をおこなうことは非常に困難で、複数の要素が複合されたものになっているケースが多い。

◎ 芸術普及活動のタイプ分類と具体例

タイプ分類	内容、具体例
地域派遣型事業	アーティストを地域に派遣したり、作品を外部に持ち出しておこなう事業 <ul style="list-style-type: none"> • 学校や福祉・医療施設、コミュニティ施設等におけるワークショップ、ミニ・リサイタル、出前展覧会など • 出張実技指導(公開レッスン、マスター・クラス、クリニック etc.)
体験・創作型ワークショップ事業	芸術を体験・創作する様々なスタイルのワークショップ事業 <ul style="list-style-type: none"> • 演劇系(脚本、からだ、声、演技、技術などに関するワークショップ) • 音楽系(楽器演奏、歌、リズムなど音楽を媒介にしたワークショップ) • 舞踊系(からだ、ダンス、振り付けなどを媒介にしたワークショップ) • 美術系(作品の鑑賞、創作などを媒介にしたワークショップ) • その他の芸術を媒介にしたワークショップ
子ども、青少年、親子向け普及事業	対象を子供や青少年、親子向けに特別に企画された普及事業 <ul style="list-style-type: none"> • 小中高生徒向けのプログラム • 親子で参加する特別プログラム
解説付き芸術鑑賞事業	専門家やアーティストの解説と一緒に芸術を鑑賞する事業 <ul style="list-style-type: none"> • レクチャーコンサート、アフター・パフォーマンス・トーク、ギャラリー・トークなど
教育普及を主目的とした展覧会事業	従来型の展覧会ではなく、教育普及活動を主目的とした展覧会事業
実技指導・専門人材育成事業	実技指導や芸術の専門家育成をおこなう事業 <ul style="list-style-type: none"> • 演劇・音楽・舞踊、美術等の実技教室 • 舞台技術学校、芸術指導者養成コース
教養型セミナー・講座事業	芸術の専門的知識を学ぶ事業 <ul style="list-style-type: none"> • 演劇講座、音楽講座、舞踊講座、美術講座
施設体験型事業	日頃見られない施設の裏側や文化施設そのものを見学・体験する事業 <ul style="list-style-type: none"> • 劇場・ホール探検ツアー、バックステージツアー、美術館探検ツアー

◎ 芸術普及活動の実施状況



(%の母数: 全体 104件、劇場・ホール 64件、美術館 40件) ■全体 ■劇場・ホール □美術館

また、劇場・ホールと美術館を比較すると、実施されている普及活動の傾向が異なるとともに、美術館の方が総じて普及活動への取り組みが進んでいることがわかる。

芸術普及活動の内容や手法、対象は、施設ごと、事業ごとに異なることから、それらを一般化して整理することは現実的ではない。そこで、具体的な普及活動の内容は、第2部に調査事例ごとにとりまとめることとし、以下では、事業の対象や手法などを手がかりにして、芸術普及活動の大きな傾向や特徴的な取り組みについて整理してみた。



「リコーダーセミナー」練習風景
—小出郷文化会館

◎ 事例調査、研究会の発言から

[将来の観客育成]

- 4万6千人の広域人口は30年後には3万人に減少する。その時文化会館が地域の欠くべからざるものとして存在するためのキーワードは小学生。今の小学生が30年後に自分の子どもをホールにつれてくるような環境づくりをおこなわなければ、ホールの未来はない(小出郷)。
- 長期的な演劇愛好者の底辺拡大を狙いとして、「あつまれ演劇なかまたち」というワークショップを開催。指導は、都城市を本拠とする市民劇団「こぶく劇場」を主宰する永山智行氏(門川)。

[学習指導要領の改訂と芸術普及]

- 「総合的学習の時間」の導入で学校の現場は混乱している。パッケージにしたものやマニュアルを希望する学校も多く、将来の観客づくりをめざすホールが地域と手を結ぶいいチャンス(熊倉)。
- 学校の指導要領が変わるのはホールにとって大きなチャンス。ホールが学校教育からはみ出た部分の受け皿を作れば、指導要領に縛られない自由な芸術教育が可能になる(小出郷)。

1. 子どもを対象とした事業、学校と連携した事業

今回の事例調査でもっとも多くの施設が取り組んでいるアウトリーチ活動は、子どもを対象としたもの、学校と連携したものであった。

(1) 子ども向けプログラムの位置づけと役割

浜田市世界こども美術館や小出郷文化会館のように、施設の目的やコンセプトそのものが子どもを中心にしている施設だけではなく、劇場・ホール、美術館とも、子どもを対象にしたプログラムを芸術普及活動の中心に位置づけている例は多い。

その背景には、新しい観客や鑑賞者の育成、青少年の情操教育への取り組み、学校教育の構造的変化への対応、地域市民への還元、といった姿勢が伺えるが、何よりも、少子化の流れの中で、10年後、20年後といった将来の地域文化施設の基盤づくりを推進するためには、子どもへのアプローチが不可欠であると強く意識されている。子ども向けのプログラムは、文化施設の長期的な「生き残り」をかけた取り組みだという施設もあった。

(2) 事業の内容

事例調査を実施した施設の具体的な子ども向けプログラムをみると、

- 越谷コミュニティセンター：音楽によるワークショップ(一般も対象)
- 世田谷パブリックシアター：子どもの劇場、中学生を対象にしたワークショップ
- 厚木市文化会館：シアタープロジェクト(演劇の出前ワークショップ)
- 小出郷文化会館：学校派遣プログラム、ヤング・ピープル・コンサート
- 門川町総合文化会館：あつまれ演劇なかまたち
- 佐倉市立美術館：体感する美術(一般も対象)

「演劇出前ワークショップ」風景
—厚木市文化会館



- 名古屋市美術館：夏休みこども美術館、アートカード
- 刈谷市美術館：中学校への派遣型鑑賞授業、ワークショップ絵本をつくらう！
- 岡山県立美術館：県美子どもツアー、常設展観察日記（一般も対象）
- 浜田市世界こども美術館：ミュージアム・スクール、ミステリー美術館、アンシャンテこども美術館

といった具合である。

アンケート調査でも、各施設が子ども向けプログラムに積極的に取り組む姿勢が明らかとなった。単に子ども向けのプログラムを用意するだけではなく、学校とどう連携すべきかということについてもさまざまな工夫がみられる。個々のプログラムの内容については、第2部に施設ごとに詳しく整理したが、これらの子ども向け芸術普及活動が、劇場やホールでおこなわれてきた従来型の子ども向け鑑賞教室とどう異なるかについては、厚木市文化会館のこれまでの子ども向けプログラムの変遷や、現在実施中の「厚木シアタープロジェクト」の考え方に特徴的に現れている。

厚木市文化会館の場合、約20年前の開館以降、中学生を対象にした人形芝居の鑑賞事業、教育委員会、子ども会と連携した小中学生のための子ども芸術鑑賞会など児童・生徒を対象とした鑑賞事業を継続的に実施している。94年からは、オーディションで選出した子どもによるミュージカルの制作などにも取り組んでいる。そうした活動の延長線上で99年に開始したのが「演劇出前ワークショップ」と呼ばれる小学校へのアウトリーチ活動である。

これは、公演や演劇ワークショップで関わりのあった劇団扉座の主宰者で脚本家の横内謙介氏（厚木高校出身）の協力を得て、学校での2時間の演劇出前ワークショップをおこなうもの。プログラムは2部構成で、前半は音を聴いて「見えないものを見る」という想像力を養うワークショップ、後半は「さよなら先生」という

[鑑賞教室と芸術普及活動]

- 鑑賞教室は子どもたちにいいものを選んで見せるというスタンスだが、厚木シアタープロジェクトは、子どもたちに劇場に来てもらい、いずれ学校の意識をもっと開いてもらうための手段でもある（厚木）。
- 子ども向けの鑑賞事業や参加型事業などを会館で実施しても、学校との関係はあまり深くならない（厚木）。
- 次のステップで、子どもたちがいつでも会館に来られるよう、質の高い「子どもの芝居」を用意したい。今の子ども向けの芝居は勘違いの部分が多いし、現在の芝居の料金は子どもには高すぎる（横内）。

[子ども向けツアー、ワークショップ]

- 毎週日曜「県美こどもツアー」を実施。ボランティアガイドが小中学生を学校単位ではなく、5人以下の個人グループで3組み受け入れるしくみ（岡山県美）。
- 夏休みの子どもワークショップは、常設展と結びつける形で毎年実施。学校向けにはガイドツアーだけでなく「アートカード」の貸し出しも行う（名古屋市美）。
- ミュージアム・スクールは週2回クラス単位で受け入れる。年間利用者は1,500人で、2年に1回の頻度で市内のすべての子どもたちが美術館を訪れる（浜田こども美）。

[学校への働きかけ]

- 市内の小中学校の児童・生徒全員に1枚ずつ行き渡るようチラシを配布。今後は、小学校への出前講座と教育ツールづくりに力を入れたい（刈谷市美）。
- 美術館はホンモノの作品があるという点で学校とは差があり、オリジナル作品と向き合うことが重要。その一方で、学校にあるものを使って、こんなことができませよ、といった提案も積極的におこなっていきたい（刈谷市美）。

参考資料:

*2:世田谷パブリックシアター、演劇ワークショップのセオリー、PT 第4号、1998年4月

*3:文化会館のマドンナたち、音楽の友社、1999年

*4:(財)地域創造、米国芸術機関の教育普及活動の概要と実際 - 音楽機関を中心に、1999年3月

*5:劇場よ街に出よう(芸団協出版部、「地域に生きる劇場」、2000年2月)

[年齢と普及活動の内容]

- 中学生は小学生と一緒にワークショップは嫌がる。小学生も低学年と高学年で別々のツアーが必要(刈谷市美)。
- ひとことで子どもと言っても、低学年と高学年、男子と女子ではまったく違うし、クラス差、学校差もあって難しい(浜田こども美)。
- 低学年は想像力や表現力の面についていけない部分があること、2コマの授業に集中できないことから、4～6年生を対象を絞った。高学年生は感情的にも敏感に反応し、涙を流す子どももいる(厚木)。

[教師向けプログラム、情報提供]

- 先生向けにロンドンシンフォニエッタの音楽教育プログラムを実施すると、先生は音楽教育に関わる何かを学校に持って帰る(越谷)。
- 図工や美術の先生が美術館を訪れることが少ないため、名古屋市美術教員による研究会「名古屋市造形研究会」の研修の会場として、当館を利用してもらっている。その中でアートゲームによる美術鑑賞の方法や美術館の利用のしかたを紹介している(名古屋市美)。
- 作品鑑賞の仕方について学校の先生に、「美術館ではこうしています」とサンプルを紹介する形で話をすることが多い。学校も「鑑賞の時間」とまどう面がある。(岡山市美)。

[教師との事前打ち合わせ]

- 年約40回のミュージアム・スクールでは、必ず先生との事前打合せをする。先生からは注文も批判もあるが、それは子どもの声と思って聞いている(浜田こども美)。
- 事前打合せを行わないため、子どもにリラックスしてほしいのに、先生の「きちんと聞きなさい」という言葉で緊張してしまうなど、こちらの意向と食い違う場合もある(小出郷)。

短いオリジナル劇をグループ別に練習、公演するというものもので、3年間で市内の全小学校(23校)を回る計画である。文化会館では、扉座の本公演をおこなう形で、学校でのアウトリーチ活動と会館の運営をつなげる工夫もおこなわれている。

(3) 子どもの対象年齢について

子どもを対象にした普及活動の場合、その学年や年齢が重要なファクターとなる。調査事例への取材でも、小学校と中学校の違い、低学年と高学年の違い、あるいは男女の違いなど、年齢によって受け取り方や反応が大きく異なるため、プログラムの開発に際しては、きめの細かい対応が求められる。とくに成長の早い小学生の場合は、1学年違うだけで反応がまったく違うというコメントもあった。

(4) 教師向けプログラム、教師との連携

子ども向けの芸術普及活動を実施するには、学校や教師とのパートナーシップを築いていく必要がある。学校との運営上の協力関係については「芸術普及活動の運営」の項で述べるが、ここでは教師向けのプログラムについて触れておきたい。

まず、学校派遣や文化施設に児童・生徒を招く普及活動の場合、担当教師にその趣旨や内容を十分に理解してもらう必要がある。そのため、美術館やホールの担当者がプログラムの中身について担当教師に事前に説明をしたり、あるいは鑑賞のためのツールを事前に渡して、生徒が学校を訪れる前に何らかの準備ができれば、普及プログラムはより効果的なものとなるだろう。

教師向けのプログラムを実施するケースもある。とくに学校教育の中に、これまではなかった「鑑賞の時間」が導入されることになり、美術館や劇場が、作品の鑑賞の方法について、情報やノウハウを提供することは、結果的に子どもたちへの芸術普及につながる。そのためには、まず、学校教師の演劇や音楽、美術などに対する体験を増やしていくことが有効だろう。



イギリスのナショナル・シアター(*2)やロンドン・シンフォニエッタ(*3)、あるいはカーネギーホール(*4)やマンハッタン・シアター・クラブ(*5)の教育普及部門では、教師向けのプログラムも積極的に開発、提供しており、こうした取り組みはわが国の地域文化施設にとっても参考になる点が多い。留意事項は、単に指導方法やノウハウだけを提供するのではなく、教師が演劇や音楽の可能性、あるいは美術の魅力を理解できるような工夫と仕組みが必要なことである。ことに、演劇やダンスは、もともと学校教育の中で正規の授業に位置づけられていないこと、音楽や美術と違って専門の教師がいないことなどから、より丁寧な対応が必要であろう。

2. 高齢者・障害者を対象とした事業

本格的な高齢時代の到来や、福祉施策へのニーズの高まりを考えると、地域の文化施設が活動を開いていく対象として、これからは、高齢者や障害者も重要なものになってくるだろう。子どもや学校向けのプログラムに比べると、まだ実施している施設は限られるが、福祉施設や病院などにアーティストを派遣したり、視覚や聴覚に障害を持つ市民向けのプログラムに取り組む美術館やホールもある。

ただし、高齢者や障害者を対象としたプログラムを実施する場合には、演劇や美術だけではなく、福祉や医療の専門的な知識や経験が求められるとともに、一般市民や子どもたちを対象にしたものよりも手厚い対応が必要になる。プログラムの実施の際だけではなく、企画や準備の段階から、それぞれの分野の専門家、あるいは福祉施設、医療施設などの協力体制を用意することが重要であろう。

地域の文化施設が、こうした福祉や医療分野の活動に積極的に関わっていくことは、文化行政の枠組みを超えたところで、劇場やホール、美術館が地域に対する役割を担うことになり、ひいては文化施設の公共的な意義や地域における存在価値の拡

[芸術や文化施設の理解促進]

- 例えば一週間劇場に通って劇場の全体像を理解しながら、ワークショップを受け、芝居を見るといったプロセスを経て、先生に演劇や劇場というものを総合的に理解してもらってから、学校との関係づくりをした方がいい(松井)。
- 先生の後には大勢の生徒がいて大きな影響力がある。学校でも創造型の活動ができることを、まず先生に伝えている。市内のすべての子どもには対応できないので、先生を通じて実施すればよい(越谷)。

[高齢者・障害者向けのプログラム]

- 「手で見る美術館」という視覚障害者向けのガイドツアーを実施。高齢者は時間的余裕もあり熱心な方も多いので、今後の高齢社会に向けて積極的に対応していきたい(名古屋市美)。
- 周辺に病院や障害者施設があり、点滴しながら来館する男性や、障害者・高齢者が休憩に立ち寄ることもある。こうした普段は来館できない人たちの潜在需要に対応できる仕組みをつくりたい(刈谷市美)。
- 福祉・医療の専門知識のある、病院や障害者施設の職員と話し合えば、具体的なニーズやプログラムがはっきりするはず(刈谷市美)。
- 音楽プログラムは喘息や自閉症患者に、心理的、身体的効果があるが、医師などの専門家がやらないと民間療法になってしまう危険性がある(坪能)。

[普及活動の有効性]

- 障害者を対象にしたプログラムは、とてもたいへんだったが、劇場の地域への広がりや、障害を持つ子どもを支える家族が、いかに自分たちの世界から出口を求めているかが実感できた(世田谷パブリック)。
- 高齢者の自立には創造活動が有効なので、自立性のある音楽活動を広げていきたい(越谷)。



「歌のおねえさん&おかあさん」ファミリーコンクール授賞式風景
—サンシティ越谷市民ホール

[地元アーティストの育成と普及への参画]

- 「歌のおねえさん&おかあさん」は行政の手が届かないところにもアウトリーチしてくれる。消防署の慰安会、敬老会、謝恩会など活動は幅広い。コミュニケーションとみんなで歌える童謡などが中心で、うまい人にはまた依頼がくる(越谷)。
- 演劇ワークショップ事業に参加した地元の演劇人が、自分たちで市民向けのワークショップを開くようになっている。(仙台青文センター)。
- アーティストや劇団からも、公演だけでなく、パブリックな活動をしたいという意向がでてきた。自分たちでプログラムを作って市民センター等に売りこみに行くなど、アイデアをどんどん出して行動している(仙台青文センター)。

[育成型事業から普及活動への展開]

- こうした広がり、演劇の持つ公共性の活用を、かねてからホールが働きかけてきた成果(仙台青文センター)。
- 「仙台劇評倶楽部」や「仙台スタジオクラブ」なども講座やワークショップの成果として生まれたが、プログラムの先に、受講生がどんなサービスを地域に提供すべきかを考えることが、ワークショップの基本理念であり、受講生の自主的な活動が育成型事業の究極の成果(仙台青文センター)。
- 「いかに人をステージに立たせるか」と「いかに観客を育てるか」の間に相乗効果を生むようなしくみづくりが必要(仙台青文センター)。

大につながるものと考えられる。

3. 市民参加型事業からの発展と連携

公共ホールでは、近年、市民が舞台づくりの担い手となる市民ミュージカルや市民オペラなどが各地で活発に実施されている。これらの市民参加型事業は、「観客 - 舞台」という関係とは異なる形で、ホールと市民を結びつける取り組みであるが、一方で舞台づくりに参加できる市民の数が限られていること、また、市民の関心が舞台に立つことに集中してしまうことなどから、地域や市民への広がりという点では課題が残されていた。

そうした中で、仙台市青年文化センターの取り組みは、市民参加型事業から芸術普及活動への展開が図られているユニークな例である。青少年の文化創造や発表、交流といったホールの設置目的を達成するために、すべての事業で「市民参加」を意識した取り組みが行われているが、こうした事業に参加した市民や地元劇団が主体となってアウトリーチ活動に取り組み始めているのである。

90年に、地元劇団の公演を中心にした「仙台演劇祭」をスタートしたところ、当時、約30だった市内劇団は今では70以上に増えている。そして、自分たちの表現にしか興味のなかった劇団に横のつながりが生まれ、「仙台演劇人フォーラム」が誕生して、現在、演劇祭の関連イベントの企画・運営はこのフォーラムが主体となって実施されている。劇評の講座では、参加者が中心となった「仙台劇評倶楽部」が生まれ、劇評誌やホームページ上で仙台で公演された演劇の批評を公開しており、こうした活動も広い意味で芸術普及への発展ととらえることができる。

越谷コミュニティセンターの「歌のおねえさん&おかあさん」の取り組みも、市民が送り手となった芸術普及活動である。ホール主催の歌唱コンクールの受賞者が、地域への普及プログラムに取り組み始めたもので、児童合唱団の指導や地域市民を対象

展覧会「ミステリー美術館」
ワークシート
—浜田市世界こども美術館



にしたワークショップなど、幅広い活動が行われている。同センターでは、こうしたプログラムがより実効的なものとなるよう、「歌のおねえさん&おかあさん」には、事前に1年間のコミュニケーションづくりのトレーニングを実施している。歌を聴いてもらうのが目的ではなく、歌を使って市民同士のコミュニケーションを促すことが、この普及活動の重要な要素となっているためである。

ホールでの市民参加型事業に直接参加できる市民の数は限られているが、その市民が普及活動の担い手となれば、普及活動の裾野はよりいっそう広いものとなる。

4. 芸術普及活動の手法

芸術普及活動には、独自の事業手法やツールが用いられるケースが多い。アンケート調査でも、体験・創作型ワークショップを導入している施設がもっとも多かったが、ここでは、その他に、普及事業に特徴的なツールや手法として、ワークシートと派遣型事業について簡単に整理しておきたい。

(1) ワークショップ

ワークショップという事業形態は、近年になって、各地の文化施設で急速に導入・実施されるようになったものである。単に芸術作品を鑑賞するのではなく、参加者がより主体的に芸術を体験したり、創作するスタイルの事業であることから、演劇や音楽、美術をより深く理解してもらう普及活動には有効な手段である。前記の子ども向けの普及活動も、そのほとんどに何らかの形で、ワークショップを取り入れている。ワークショップには決まったスタイルがあるわけではなく、テーマや対象者に応じてさまざまなものが可能で、個々の具体的な内容については、「第2部 調査事例資料集」を参照されたい。

(2) ワークシート、アートガイド

次に芸術普及活動の手法として取り上げたいのが、ワークシートやアートガイドといったツールである。これは劇場やホールよ

[ワークショップの可能性]

- ギャラリートーク、ワークシートとも言葉による説明を主体とするものだが、ワークショップはそれをうち砕く要素もある(中山)。
- ワークショップの場合、参加人数が限られてしまうが、たとえ1回20人でも子どもが出入りすることで、両親や先生たちと人間関係の広がりができることにメリットがある(松井)。
- 「体感する美術」そのものが、アウトリーチでありアートである。美術に関わる態度の普及をしないで作品情報だけを押しつけてもだめ。美術に関わり、自分でものを考えること自体を普及していきたい(佐倉市美)。

[ワークシートやアートカードの効果]

- 学校で事前に「アートカード」のゲームをすると、子どもたちは「この絵を見よう」と目的を持って来るため、鑑賞が散漫にならず集中している。カードは細かなところまで手にとって見られるのも利点(名古屋市美)。



「アートカード」
—名古屋市美術館

- ツールを用意していれば、展示をやっていない間も普及活動が可能になる(刈谷市美)。
- ワークシートは、子どもを対象にした普及活動の柱になる。ギャラリートークでは、誰でも人を惹きつける会話ができるとは限らないが、ワークシートを使えば、誰でもある程度の質を維持できる(浜田こども美)。
- 質の高いワークシートを作るためには、企画担当学芸員との徹底的な議論や検討が必要。担当者の独りよがりのものでないためにも、相互に意見交換できるような態勢が重要(中山)。

[劇場や美術館から外への展開]

- 三つの「ふ(ふれる、ふるえる、ふえる)」プロジェクトとして、城山トンネルコンサート、ハーブ IN 宮柵二記念館、ピアノ IN 神湯温泉倶楽部、守門村村議会議場声楽コンサートをおこなった(小出郷)。
- 県内の他施設へ作品の派遣型事業を実施したことがあるが、相手先の展示環境や条件が問題。美術館の使命の「保存」と「公開」は本来矛盾するもので、県下には保存に対する知識や技術、あるいは設備の整っていないところもある(岡山県美)。

りも美術館で導入されている例が多い。通常、展覧会カタログとは別に、子どもや一般市民が楽しみながら作品を鑑賞できるよう工夫された冊子が用意される。また、名古屋市美術館では、常設展の展示作品を紙焼きにしてビニールコーティングを施した「アートカード」を用意している。子ども向けのガイドツアーの実施に先立って、学校に貸し出すことで、事前に作品に対する知識や情報を提供し、知的好奇心を持って来館してもらおうという試みである。こうしたツールを事前活用すれば、美術館での鑑賞ツアーでは、作品へのより深い興味生まれ、主体的な参加が可能になるという。6組作成したセットは現在フル稼働の状態だということで、こうしたツールがいかに有効かを物語っている。

その他にも、ギャラリートークを補完するツールとして、浜田世界こども美術館では、コンピュータを使ったこども向けの解説ツール「はまびーくんのギャラリートーク」を用意したり、刈谷市美術館では、作品カードやパズルを作成するなど、美術館では、こうしたツールの作成が日常化しつつある。残念ながら劇場やホールでは、現在のところ、こうしたワークシートを用意するケースは限られており、美術館のケースなども参考に、普及活動に有効なツールづくりが待たれるところである。

(3) 派遣型事業

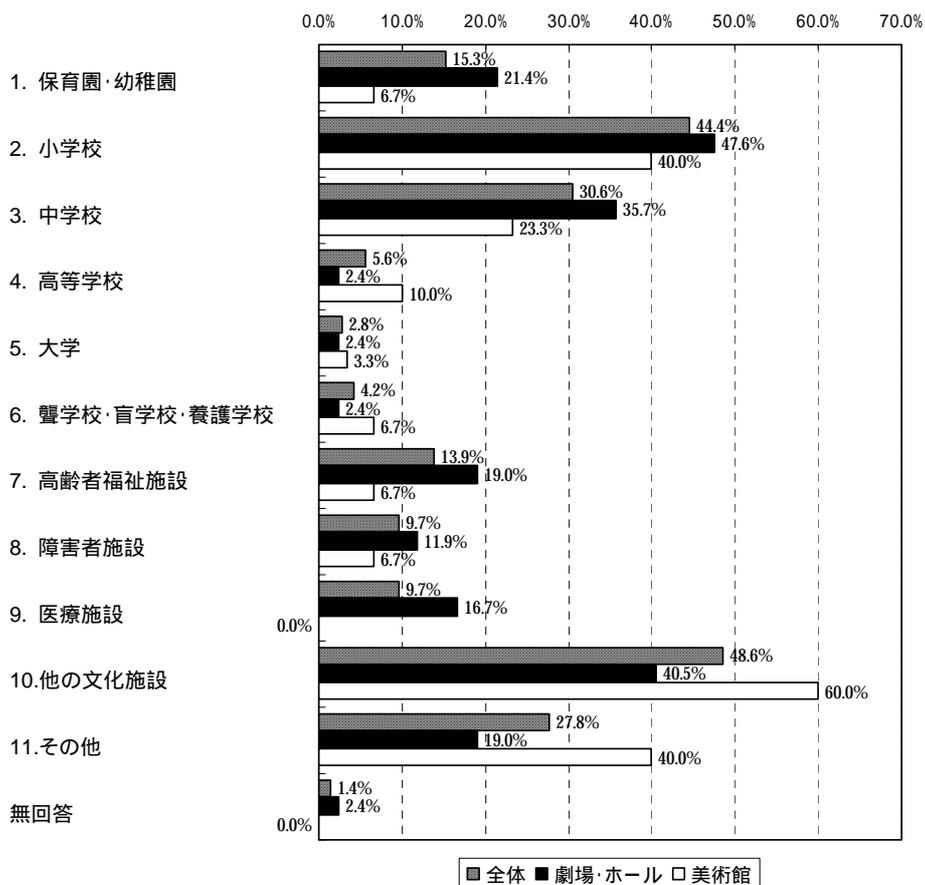
もうひとつ普及活動に特徴的な手法として、派遣型の事業をあげておきたい。これは、劇場やホール、あるいは美術館などの文化施設の外で実施される普及事業で、先に触れた学校や福祉施設等への派遣型事業は典型的な例である。市民や地域に芸術を広く提供することが、芸術普及活動の大きな目的であることを考えると、普段、ホールや美術館を訪れることのない人々、文化施設まで出かけることのできない市民、あるいは演劇や音楽、美術にもともと関心のない層にいかにか働きかけていこうか、普及活動の大きなポイントを握っている。

そのためには、ホールや美術館は積極的に地域に出て行く必要がある。こうした取り組みでさまざまな可能性を試しているの

が小出郷文化会館であろう。アーティストの派遣先は、学校や病院だけではなく、村議会議場や温泉のロビー、福祉施設、新規開通したトンネルなど、地域資源の中から常に新しいアウトリーチ先を模索し、ホールの活動の底辺を広げている。

ただ、美術館の場合は作品そのものを外部に持ち出すにはさまざまな制約があり、前述のアートカードやワークシートなどのツールはそういう点でも有効といえる。

◎ 文化施設以外で芸術普及活動を実施する場所



(%の母数: 全体 72件、劇場・ホール 42件、美術館 30件)